

科学コミュニケーション活動の参加者の意識

安達 光理

近年、科学コミュニケーション施策が各地で積極的に行われている。科学コミュニケーションに注目が集まるようになったが、日本の科学コミュニケーションの歴史は諸外国と比べると浅く、知識や経験の蓄積は未だ少数である。また、現在の科学コミュニケーションに関する研究で、科学者側の意識調査や、サイエンスカフェに関する研究は多いものの、科学コミュニケーション活動の参加者の特徴と科学コミュニケーション活動の形態の選択との関係性について調査した研究はまだない。

本研究では、科学コミュニケーションの参加者を対象として参加者の興味関心の広さ、科学コミュニケーションへの印象及び特性が科学コミュニケーション活動の形態の選択にどのように影響するのかを明らかにする。研究方法は、宇宙航空研究開発機構筑波宇宙センターの特別公開の参加者に対して質問紙調査を行った。

独立性の検定を行った結果、好奇心という特性がサイエンスカフェのような他の参加者と交流ができる活動への選択との間に関係があるといえることが分かった。つまり宇宙センター特別公開の参加者の中で、好奇心の高い人は他者と交流できる活動への参加意向が見受けられることが分かった。また、興味関心のある分野の広さについて検定を行ったところ、興味が広いほど他の参加者と交流ができる活動への参加意向が見られた。しかし、講演会などの専門家の話を長く聞ける活動への参加意向との関係は明らかにできなかった。科学コミュニケーション活動へ参加経験がある人と参加経験がない人では科学コミュニケーション活動への印象に差が存在することが明らかになり、参加経験がある人は活動への不相应性が弱い、参加経験がない人は不相应性が強く気軽な印象が弱いといえることが分かった。ここから、活動へ参加したことがない人々は科学コミュニケーション活動に対して気軽な印象を受けにくいということが明らかになった。また、気軽な印象の強い人々はサイエンスカフェ、不相应性の低い人々は講演会のような活動への参加意向が見られた。

以上より、サイエンスカフェのような場は一部の好奇心旺盛な人や参加経験者、気軽な印象を持つ人に参加意向があることが示された。よって、活動の場を設定する際、および広い層の人々を対象とする場合、他者と密なコミュニケーションが必要となる活動よりも、今後の参加の足掛かりとなるようなイベント性の高い活動など気軽に立ち寄ることができる場の提供を行うことが必要になると考えることができる。

(指導教員 歳森 敦)